

中国語を母語とする日本語学習者の副詞産出について

——「書く」場面と「話す」場面における産出の実態調査——

那 花 侑 香

第1章 はじめに

日本語学習者との会話や SNS など文字でのやり取りの中で、コミュニケーションに影響を及ぼさないものの、使われる言葉に違和感を抱くことは少なからずある。特に副詞に関して、会話・文面でこのような気づきが多い。

そこで、本研究では中国語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者による副詞産出の実態を探り、日本語教育における副詞の効率的な指導について述べる。

以下、第2章で先行研究を紹介したうえで本研究の意義を述べ、第3章で調査概要とデータの詳細を示し、第4章で調査結果と考察を行い、第5章で結論と今後の課題をまとめる。

第2章 先行研究と本研究の目的

副詞の適切な使用の判断は母語話者であっても容易ではない。以下、日本語学習者の副詞使用の適切さに関する研究のいくつかを挙げる。

前坊 (2009) は副詞の類義語を提示し、留学生にその使用がレポートや論文の使用に適切かどうか判断させる調査を行った。その結果、話し言葉の要素を持つものや日本語能力試験 1, 2 級レベルの語彙は比較的正しく判断され、日常会話で使用頻度の高い初級段階で学ぶ語彙は正しく判断されにくいと述べている。また、留学生へ判断基準のインタビューも行われており、主に漢字で書けるかどうかという「表記」に関するものや、新聞や教科書でよく目にするなど「その語と出会う場所」で判断しているようだと言っている。

高野 (2016) は、学習者のレポートや論文を書く際の問題点として副詞の不適切な表現を用いることを挙げ、日本語母語話者でも不適切であると判

断はできるが、どのような代替表現で訂正するかは個人の語感により異なることも多いとして、「ちょっと」とその類義語を比較している。結果として「ちょっと」は中級レベルで出現頻度が高く上級レベルでも出現したため、文体の意識化が必要だと述べている。また添削の際、代替表現を示すか削除すべきかなど、同一の団体や課題においては統一の基準が必要であるとまとめており、適切な使用の難しさも述べている。

これらのことから、学習者に指導する際、単純に「話し言葉」「書き言葉」と説明するだけでは不十分であり、場面により適切さが異なることを指導者側も意識する必要があると考えられる。

話す場面での副詞の使用に関して、中俣 (2016) は日中 Skype 会話コーパス¹を用いて学習者と母語話者の使用語彙を調査し、副詞に最も大きなズレが見られ、その差異は単一の要因によるものではないだろうと述べている。また、副詞は日本語学の研究としても日本語教育学の研究としても遅れている分野であり、教科書で導入される副詞についても十分吟味が行われているとは言いがたいとしている。

多くの研究が書く場面か話す場面の一点に焦点が当てられているため、本研究で「書く」「話す」それぞれの場面における中国語を母語とする学習者の産出データを用いて、レベル別、学習環境別に学習者の副詞の産出実態を明らかにする。また、日本語母語話者との比較を行い、両者の類似傾向と相違点を明らかにする。上記の作業を通して得た知見を用いて、副詞の効率的な指導における基礎研究としたい。

第3章 調査概要

本研究では I-JAS² のストーリーテリング、ストーリーライティング各2種のテーマ（「ピクニック」、「鍵」）から、中国語を母語とする日本語学習者

1 2012年5月から7月にかけて、日本・東京の実践女子大学と中国・長沙市の湖南大学との間で行われた日本語での Skype 会話交流活動の内容を録音、文字化したコーパスで、中俣尚己氏によって開発されたものである。

2 日本語学習者の話し言葉・書き言葉を大量に収集して電子化した言語資料で、コーパス検索アプリケーション中納言で検索できる。

148名³（中国教室環境 100名、日本国内教室環境 42名⁴、日本国内自然環境 6名）、日本語母語話者 50名、計 198名分のデータ⁵から中納言 2.4.2⁶を用いて副詞を抽出し、分析を行った。今回、中国語を母語とする日本語学習者のレベルは初級 14人、中級 116人、上級 18人となる。レベルの判定は学習者の SPOT⁷の得点を参考に 31~55点を初級、56~80点を中級、81~90点を上級とした（筑波日本語テスト集ホームページから「得点の解釈」⁸参照）。

ストーリーテリング、ストーリーライティングは同一の 4、5コマからなるイラストを見て、第 3者の視点からそのストーリーを話す（テリング）、描写する（ライティング）課題である（図 1、図 2 参照）。先にストーリーテリ

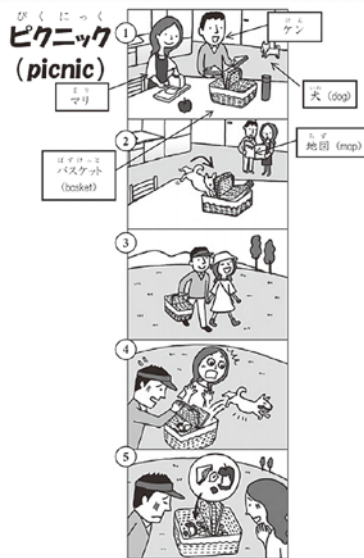


図 1 イラスト「ピクニック」

3 台湾で取った 50名のデータは含まない。

4 出身国は中国だが母語が韓国語、モンゴル語である 2名は除いた。

5 本研究では 2019年 6月現在公開されている第四次データまでを対象とする。

6 国立国語研究所で開発されたコーパスを検索することができる Web アプリケーションである。

7 筑波大学で開発された短時間で日本語運用力を測定するテスト。SPOT (Simple Performance-Oriented Test) は、TTBJ (Tsukuba Test-Battery of Japanese) の 1つで、言語知識と言語運用の両面から日本語能力を測定するものである（迫田 2016: 98）。

8 <http://ttbj-tsukuba.org/p1.html>

ングを行い、4、50分後にストーリーライティングが行われた。ストーリーテリング、ストーリーライティングは、同条件で行った同じタスクの集合であるため、母語話者と学習者の同一テーマにおける「話す」と「書く」の産出状況の相違を観察するのに適している。なお、これ以降ストーリーテリングをST、ストーリーライティングをSWと表記する。

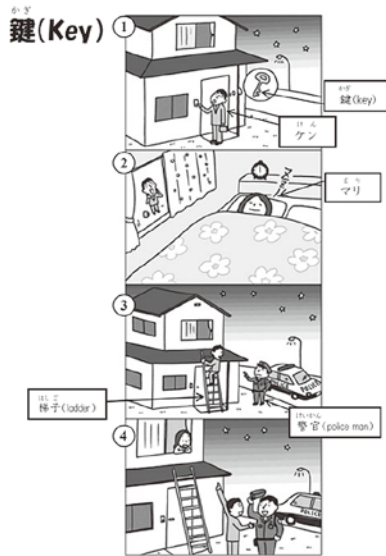


図2 イラスト「鍵」

抽出したデータを基に、副詞を母語別・レベル別・学習環境別に比較分析を行う。また、学習者の過剰使用語・過少使用語についても観察する。過剰過少の基準として、田中・近藤(2011)の対数尤度比(Log Likelihood Ratio、LLRと記す)を補正した数値で示される特徴度を参考にする。特徴度は当該資料における当該語が、他の資料(参照資料)と比べて出現度数の点でどの程度特徴的であるかを示す値である。

特徴度が0であれば、当該資料と参照資料の出現の程度は等しく、特徴度が正の値で、かつ値が高いほど、当該資料で高頻度という意味で特徴的な語と見なされる。逆に、特徴度が負の値で、かつ値が低いほど、当該資料において低頻度という意味で特徴的な語と見なされる(田中・近藤 2011:62)。そ

の計算式を以下に示す。

$$2 \left(a \ln a + b \ln b + c \ln c + d \ln d - (a+b) \ln (a+b) - (a+c) \ln (a+c) - (b+d) \ln (b+d) - (c+d) \ln (c+d) + (a+b+c+d) \ln (a+b+c+d) \right)$$

a：当該資料での当該語の度数

b：参照資料での当該語の度数

c：当該資料の延べ語数 - a

d：参照資料の延べ語数 - b

※ただし、 $ad - bc < 0$ の場合の場合、-1 を乗じる補正を行う。

ここでの \ln は自然対数を表す。a または b が 0 の場合、 $a \ln a$ または $b \ln b$ を 0 と見なして対数尤度比を算出する。

第4章 調査結果と考察

本章では、副詞の産出状況と過剰使用語・過少使用語を表にまとめ、結果分析と考察を行う。副詞の産出状況については、2つのテーマごとにテリング・ライティングに分け、母数を100に揃えた上で母語別・レベル別・学習環境別に表に示す。もともとの母数差が大きい項目もあるが、本研究では分類ごとの人数を調整した上での比較となる。なお紙幅の都合上、副詞の産出状況を示す表は省略する。

本稿では、特徴度の有意水準を0.01とし、特徴度の絶対値が6.63以上のものを対象に分析を進める⁹。なお本研究では、特徴度の絶対値が10以上の語を過剰使用語・過少使用語の表に示す。

4.1 母語話者と中国語を母語とする日本語学習者の相違

4.1節では母語別の産出特徴を分析する。以下ではそれぞれの副詞産出状況を表1~3で示す。

9 正の値の特徴度の有意水準とその臨界値は次の通りである。(小西 2017:83)

有意水準	0.1	0.05	0.025	0.01	0.005	0.001
臨界値	2.71	3.84	5.02	6.63	7.88	10.83

表1 母語話者・学習者のタスク別の副詞産出語数(延べ語数・異なり語数)

		ST1	SW1	ST2	SW2
母語話者	延べ語数	144	114	182	122
	異なり語数	36	24	30	21
学習者	延べ語数	150	128	248	187
	異なり語数	52	50	43	41

表2 中国語を母語とする日本語学習者の ST における過剰使用語・過少使用語

過剰使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度	過少使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度
全然	59	3	13.84	全く	0	7	-21.49
				すっかり	0	6	-18.42

表3 中国語を母語とする日本語学習者の SW における過剰使用語・過少使用語

過剰使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度	過少使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度
全然	60	0	39.13	すっかり	1	9	-17.19
もう	87	4	34.17				
良く	16	0	10.43				

母語話者に比べ学習者の延べ語数は多い。特にストーリー2においてその傾向が強い。また、母語話者はST1、ST2共に産出された語が13語、SW1、SW2共に産出された語が6語であるのに対し、学習者は前者が25語、後者が23語と多く、異なり語数に占める割合の上でも両者の差は小さい。

過剰使用語・過少使用語を見ると、テリングでは「全く」「すっかり」が特に過少産出され、「全然」が過剰産出されている。「全く」がテリングでのみ過少使用語となっていることから学習者は書き言葉として認識している可能性が考えられる。またライティングでは「すっかり」が過少産出、「全然」「もう」「良く」が過剰産出されている。産出数としてはテリング・ライティング共に上位にある「もう」「良く」がライティングでのみ過剰使用語となっていることから、文体差の意識が母語話者と異なっていることが窺える。「すっかり」は語彙難易度が日本語能力試験¹⁰N4レベルであるが、テリング・ライ

10 日本語能力試験には、上からN1、N2、N3、N4、N5の5つのレベルがある。

ティング共過少使用語となっている。

4.2 中国語を母語とする日本語学習者のレベルにおける相違

4.2節ではレベル別の副詞産出特徴を分析する。以下では、初級・中級・上級の副詞産出を表4～表10で示す。なお、前述したように初級14人、中級116人、上級18人となる。

表4 学習者のレベル別、タスク別副詞産出語数(延べ語数・異なり語数)

		ST1	SW1	ST2	SW2
初級	延べ語数	186	107	257	114
	異なり語数	16	10	15	10
中級	延べ語数	138	126	226	184
	異なり語数	42	42	35	37
上級	延べ語数	206	156	383	261
	異なり語数	23	17	22	18

表4から延べ語数を見ると、テリングにおいては上級・初級・中級の順で値が大きく、ライティングでは上級・中級・初級の順に大きくなっている。単純に母数をそろえた値で日本語母語話者の延べ語数と比較してみると、テリングでは中級、ライティングでは初級が最も日本語母語話者に近い値である。総産出語数における副詞の割合を見ても同様の結果が得られた。また、テリングで産出された副詞の割合がライティングで産出された副詞の割合を上回るのは初級のみであり、両者の比率が最も日本語母語話者に近いのが初級である。

表5 初級レベル学習者のSTにおける過剰使用語

過剰使用語	学習者産出数	母語話者産出数	特徴度
多分	8	0	22.94
わん	4	0	11.47

表6 初級レベル学習者のSWにおける過剰使用語

過剰使用語	学習者産出数	母語話者産出数	特徴度
全然	9	0	31.29

表7 中級レベル学習者のSTにおける過剰使用語・過少使用語

過剰使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度	過少 使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度
全然	46	3	13.27	全く	0	7	-18.84
				すっかり	0	6	-16.15
				既に	0	5	-13.45
				ぐっすり	5	10	-10.83

表8 中級レベル学習者のSWにおける過剰使用語・過少使用語

過剰使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度	過少 使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度
全然	48	0	38.66	すっかり	1	9	-14.19
もう	70	4	34.11				
良く	13	0	10.46				

表9 上級レベル学習者のSTにおける過剰使用語

過剰使用語	学習者産出数	母語話者産出数	特徴度
もう	19	10	13.03
多分	5	0	11.17

表10 上級レベル学習者のSWにおける過剰使用語

過剰使用語	学習者産出数	母語話者産出数	特徴度
もう	13	4	18.30
ずっと	5	0	13.21

表5～表10に示されるように、過剰使用語・過少使用語をレベル別に見ると、上級のライティングで過剰使用語となっている「ずっと」は語彙難易度がN4レベルでテリング・ライティング共比較的多く産出されているが、初級はライティングでのみ、中級で両者共産出しており、学習者のレベルが上がるにつれ産出数が増えている語である。しかし、母語話者はテリングで1回のみ産出しており、母語話者と学習者の文体意識の違いや産出頻度の違いが窺える。また、上級では「全然」が過剰使用語になく、学習者のレベルが上がるにつれ適切な産出に近づく語もあると考えられる。

4.3 学習環境における相違

4.3節では学習環境別の副詞産出特徴を分析する。学習環境を「中国と日

本国内」「教室と自然習得」の2つに分けて比較分析を行う。

なお、それぞれの環境に初級または上級の学習者が含まれず、習熟度による差異も影響し得るが、本研究では学習環境による差異として述べ、学習環境別の習熟度別比較は今後の課題としたい。

4.3.1 国外環境(中国)と日本国内環境

中国で学習する学習者(100名)と日本国内で学習する学習者(42名)それぞれの副詞産出数を表11～表15で示す。

表11 国外環境・日本国内環境のタスク別の副詞産出語数(延べ語数・異なり語数)

		ST1	SW1	ST2	SW2
国外環境	延べ語数	153	141	258	216
	異なり語数	39	43	37	36
日本国内環境	延べ語数	145	100	229	127
	異なり語数	32	22	27	22

表11に示されるように、中国で学習する学習者はストーリー1において、異なり語数でライティングがテリングを上回っている(43:39)。ストーリー2においても差は1語(36:37)であり、日本国内環境学習者と異なる。また、ライティングの延べ語数において特に差が開いている。

表12 国外環境学習者のSTにおける過剰使用語・過少使用語

過剰使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度	過少 使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度
全然	41	3	12.44	全く	0	7	-17.96
もう	69	10	10.48	すっかり	0	6	-15.39

表13 国外環境学習者のSWにおける過剰使用語・過少使用語

過剰 使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度	過少 使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度
もう	69	4	37.09	すっかり	1	9	-13.21
全然	36	0	31.15				
良く	14	0	12.11				
ずっと	12	0	10.38				

表 14 国内環境学習者の ST における過剰使用語・過少使用語

過剰使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度	過少 使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度
多分	13	0	17.61	そう	2	16	-12.87
全然	18	3	11.41				

表 15 国内環境学習者の SW における過剰使用語・過少使用語

過剰使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度	過少 使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度
全然	24	0	40.81	すっかり	0	9	-10.05
もう	18	4	14.20				
直ぐ	8	0	13.60				

過剰使用語・過少使用語を見ると、国内環境のテリングでのみ過少使用語となっている「そう」は語彙難易度が N5 レベルで難易度は低いが、「そうです」の形での産出がほとんどであり、他よりも多様な表現がされなかったことが過少使用語となった原因と考えられる(表 14)。ライティングの過剰使用語「直ぐ」も語彙難易度が N5 レベルであるが、産出されたものの 9 割が国内環境の学習者によるものであり、学習者や語彙のレベルだけでなく学習環境も副詞産出に影響を与える要因になり得ると考えられる(表 15)。

4.3.2 教室環境と自然環境

日本国内における教室環境(42名)と自然環境(6名)それぞれで学習する学習者の副詞産出状況を表 16~ 表 19 で示す。

表 16 教室環境・自然環境のタスク別の副詞産出語数(延べ語数・異なり語数)

		ST1	SW1	ST2	SW2
教室環境	延べ語数	133	95	233	131
	異なり語数	29	19	24	21
自然環境	延べ語数	214	129	200	100
	異なり語数	9	7	8	6

表 17 教室環境学習者の ST における過剰使用語・過少使用語

過剰使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度	過少 使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度
多分	11	0	16.47	そう	2	16	-10.95
全然	17	3	12.39				
直ぐ	11	1	10.86				

表 18 教室環境学習者の SW における過剰使用語・過少使用語

過剰使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度	過少 使用語	学習者 産出数	母語話者 産出数	特徴度
全然	22	0	40.96	がっかり	0	10	-10.04
直ぐ	8	0	14.89				
もう	15	4	12.37				

表 19 自然環境学習者の ST における過剰使用語

過剰使用語	学習者産出数	母語話者産出数	特徴度
わん	7	0	29.82

自然環境では、教室環境では産出されていない「ぐちゃぐちゃ」「びんぼーん」が産出されている。「びんぼーん」は母語話者も産出しており、生活の中で使用する語の産出が自然環境の特徴として挙げられる。また、「わん（鳴き声）」が過剰産出されたほか、特徴度の絶対値が 10 以上のものはなかった。

表 18 における教室環境のライティングで過少使用語となっている「がっかり」は語彙難易度が N2、N3 レベルで比較的難易度の高い語であり、産出されにくい可能性が考えられるが、自然環境で過剰使用語となっている「わん」の語彙難易度は N2、N3 レベルと難易度としては高いため、語彙レベルよりインプット量が産出に影響を与えることもあったと考えられる。

第 5 章 結論と今後の課題

本研究での比較分析の結果として、第 4 章 1 節では、学習者は母語話者に比ベストーリー（話題）ごとに語を選択する傾向はないこと、類義関係にある語「全然」「全く」はより語彙難易度の低いほうが産出されやすいこと、また母語話者と文体意識が異なる語があることが挙げられる。

2節では、学習者の産出数に注目した時初級の学習者で最も母語話者に近い数値を示すこと、学習者の習熟度が上がり産出できる数が増えることは必ずしも適切な産出に近づくわけではないこと、また「全然」に関しては上級でのみ過剰使用語でなくなり、学習者のレベルが上がることにより適切な産出に近づく語もあることが窺える。

3節では、学習者や語彙のレベルだけでなく学習環境やその語との接触頻度も産出に影響を与え得ること、学習環境により産出傾向が異なる点があることがわかった。

以上のことから副詞の産出には様々な要因が関わっていることは明らかであり、単純に習熟度が上がれば適切さが増すものではないことがわかる。過少使用語がなかったのは初級、上級、自然環境の学習者であり、初級段階でも極端な語彙の過少産出は観察されなかったため、日本語教育において副詞を指導する際は学習者の語彙数を増やすことよりも、その語の使用場面や類義語との差異などに重きを置くべきだと考えられる。どの語をどの段階で指導すべきか、また何を扱うべき語とするかという語彙シラバスの再考、加えて使い分けの基準を明確にすることが効率的な指導につながると考える。

本研究では、誤用や適切さ、母語の影響などの詳細な産出状況、産出要因の分析、及び副詞の種類別の産出傾向、0.05有意水準内の過剰使用語・過少使用語について追究できなかったが、今後の課題とする。

参考文献

- 小西円 (2017) 「日本語学習者と母語話者の産出語彙の相違：I-JAS の異なるタスクを用いた比較」『国立国語研究所論叢』13, pp.79-106.
- 迫田久美子, 小西円, 佐々木藍子, 須賀和香子, 細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』6巻3号, 国立国語研究所, pp.93-110.
- 高野愛子 (2016) 「程度副詞『ちょっと』をめぐる文体差—日本語学習者作文コーパスから見られる傾向—」『語学教育研究論叢』33巻, pp.333-355.
- 田中牧郎・近藤明日子 (2011) 「教科書コーパス語彙表」『言語政策に役立つ、コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用』pp.55-63. (文部科学省科学研究費特定領域研究「日本語コーパス」言語政策研究班報告書 JC-P-10-01)
- 中俣尚己 (2016) 「学習者と母語話者の使用語彙の違い—『日中 Skype 会話コーパス』を用

いて一」『日本語／日本語教育研究会』7号, pp.1-14.

前坊香菜子(2009)「語の文体的特徴に関して学習者はどのように認識しているか—類義語の副詞に対する調査から—」『日本語教育方法研究会誌』16巻1号, pp.14-15.

参考資料

中納言、I-JAS (多言語母語の日本語学習者横断コーパス) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/ijas/search>

筑波日本語テスト集(TTBJ)「得点の解釈」, 2019.7 閲覧 <http://ttbj-tsukuba.org/p1.html>

リーディングチュウ太 <http://language.tiu.ac.jp/>